北海道新聞
第3種郵便物認可

はたらく.com　就活　仕事

函館高専「進路支援システム」改良

企業情報どこでも検索

函館工業高等専門学校は学生が就職活動で求人や企業情報を検索する「進路支援システム」を自宅などでも使えるよう今年1月に改良した。就職先は学校推薦で決まることが多く、毎年、ほぼ100%の就職率を誇る。システムの活用により、学生がより主体的に企業を選ぶことができ、高専側も「学生と企業のミスマッチを減らすことにつながる」と期待している。

（函館報道部　野村佳南）

今春、機械工学科の男子学生(20)は第1志望の企業の面接を終えた後、選考から外れたと知らされた。すぐに、進路支援システムを自宅で使って求人情報を調べたことで、「自分に合う企業を考え、次の応募のために翌朝から動きだすことができた」と話す。学校の推薦を再びもらい、5月上旬には産業ガスメーカーへの就職を決めた。

函館高専の本科は5年制で、卒業生の7割程度が就職し、その他は2年制の専攻科に進んだり、大学に編入学したりする。2014年春の卒業生228人のうち、就職を決めたのは173人で、進学・編入学したのは50人だった。

高専生の場合、4年生の12月に企業の求人情報が開示され、5年生の4月に採用選考が始まる。就職活動の日程は大学生と基本的に同じだ。ただ、高専生は一般に学校の推薦を受けて採用試験に臨むため、何社もの採用試験を並行して受けることはない。函館高専キャリア教育支援室長の三島裕樹准教授は「学生は担任からエントリーシートの書き方や面接の指導を何度も受け、希望する1社に全力を注ぐ」と説明する。

求人の際は、企業が学科を指定したり、採用担当者が高専を直接訪れたりすることが多い。そのため「教員や先輩とのつながりが就職先に大きく影響する」(三島准教授)ことになる。

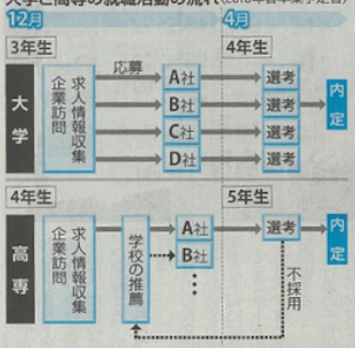
精密機器メーカーに内々定した機械工学科5年の石田空さん(20)は、志望の理由を「学校に来てくれたOBのリクルーターと話して、社内の雰囲気を聞けたことが決め手だった」と言う。6月末現在、5年生の就職希望者のうち83%が就職を既に決めている。

就職活動では、最初にエントリーした企業から内定をもらう学生が少なくない。高専側は「企業のイメージが入社の前後で違い、自分と合わない」と感じるミスマッチをなくすため、担任との面談を頻繁に行っている。さらに「学生にもっと主体的な企業選びをしてもらおう」と進路支援システムの改良を決めた。

システムは08年に独自に開発し、学科や志望職種などを入力すれば、該当する求人やインターンシップの募集情報が検索できる仕組みだ。13年までは学内のパソコンでだけ使えたが、改良型は自宅のパソコンやスマートフォンでも使える。いつでもどこでも検索でき、学生の就職活動のスピードアップにつながっている。

三島准教授は「これまでは教員やOBによるソフト面での就職支援が大きかったが、これからはハード面での支援も充実させていく」としている。

大学と高専の就職活動の流れ(2015年春卒業予定者)



求人情報の閲覧などが行えるキャリア教育支援室を利用する学生たち

就活スピードアップ　学生の主体性を促す

ミスマッチ解消目的■学科に合う職種表示へ

函館高専の「進路支援システム」は高専生の就職活動をどう変えるのか。開発を担当した生産システム工学科の小山慎哉准教授＝写真＝に、システム改良のねらいや今後目指す方向を聞いた。

教員や先輩の人脈で就職先を決めることが多かった高専の就職活動は支援が手厚いといえますが、学生が学校側の情報提供に頼ってしまいがちです。就職後に「仕事や会社の雰囲気が思っていたのと違った」と感じる卒業生を減らすには、学生が自分で企業を研究し、納得して企業を選ぶことが必要と考えました。

改良したシステムは、学外からも接続できるようにしたため、学生が空いた時間に求人情報を見ることができるようになりました。函館高専には寮生がいるので、年末年始に帰省しても実家で情報収集が可能です。今後はさらに改良し、学生の学科に合わせて適合性の高い職種の企業を優先して検索結果に表示させるようなシステムにしたいと考えています。

現在、函館高専のほか、仙台高専や高知高専など道外5高専がこのシステムを利用しています。将来は全国51の国立高専で同じシステムを使えるようになるのが理想だと思っています。システムを統一すれば、情報の入力形式が同じなので、求人側の企業の手間が省ける利点があります。学生には自分に最適の仕事を選ぶことができるよう、システムを有効に使ってもらうための指導をしていくつもりです。